

商都復興議書

107

浅井了意著
畠銀鶴著

博理李今村明恒述

明暦安政及大正の難

武松庵ぶみー時雨乃袖
今後の地震と東京市

第三輯
募編市京東

明暦の大震と安政の大震

はしがき

今回の大震の苦悶を嘗めの當りに見た我等は、斯うした變災が度々時を隔てゝ東京の地に
繰りかへされて來ることを忘れることは出來ない。江戸及東京の歴史の中で我等の記憶す
べき事項は澤山あるが、明暦の火事と安政の地震と、さうして大正の地震とは、特に東京
市民として永久に記憶すべきものゝ一であると思ふ。況んや今回の震火災の慘害を受けて、
今帝都復興の大業を成し遂みつゝある我等に於ては、是等歴史的災害を強く記憶して居つ
てこそ今后の我等の子孫の爲めに最も安全なる新都市を營造せねばならぬといふ決心と奮
闘努力が湧くのであると思ふ。

こゝに錄するのは、「明暦の大震」と「安政の大震」に就いて其状況を知るに適するものと

して前者にありては、淺井了意の作と稱せらるゝ「武藏あぶみ」を、後者にありては、畠銀
雞の著『時雨の袖』を選び、之れに東京市史稿等に掲げられたる變災資料をも参考としたの
である。而して、武藏あぶみは前後の二三頁を省略したるのみで殆んど其の全文を掲げ、
時雨の袖よりは、慘害の状況を知るに足るべき記載のみを探り、其他省略したるもののが少
くない。猶、文章は成るべく原文のまゝを記載することに努めたるも、一見讀むに困難な
用語には振假名を附し或は送り假名を加入したる個所も多少あることを諒せられたい。

(「武藏あぶみ」と「時雨の袖」の全文は、博文館發行近古文藝溫知叢書第十一編、後者は江
戸叢書刊行會發行江戸叢書卷の十に記載されてあります。)

— 武藏あぶみ 淺井了意著

武藏あぶみの撰者は、本書中に樂齋房と記せる個所もあるが、世上多く淺井了意の作と傳
へられ、活東子珍書目録にも淺井了意作とあるを以て習く之に隨つて置く。

此の書名を「武藏鑑」と名付けたるは蓋し火事は江戸の名物なることを當時鑑が武藏の名
産として知られ、然なも嘔臘の火事の大元なる本郷四丁日本妙守が其頃武藏鑑の工匠等の
住せる鎧坂(今の眞砂町本郷駒込區司令部側)に隣せる等の關係から、かく名付けたるもの
と思はる。 — K —

さても、明暦三年正月十八日辰の刻ばかりのことなるに、乾のかたより風吹出し、しきりに
大風となり塵芥を中天に吹き上げて、空にたなびき渡る有様、雲があらぬか煙の渦くか、春の
霞のたなびくかと怪しむほどに、江戸中の貴賤門戸を開き得ず、夜は明けながらまだ暗闇の如

く、人の往來もさらになし。

やうやく未の刻におし移る時分に、本郷の四丁目西口に、本妙寺とて日蓮宗の寺より俄かに火燃え出て黒煙天をかすめ、寺中一同に焼あがる折ふし魔風十方に吹き廻はし、即時に湯島へ燒出てたり。はたごや町より遙かに隔てし堀を飛び越え、駿河臺永井信濃守、戸田采女守、内藤飛驒守、松平下總守、津輕殿その外數ヶ所、佐竹よしのぶを始めまるらせ、鷹匠町の大名小路數百の館忽ちに灰燼となりたり。

それより町家鎌倉河岸へ焼け通りぬ。かくて酉^酉の刻にいたりて風は西になり烈しく吹きしばりければ、神田橋へは火移らずして遙かに六七町隔てゝ一石橋の近所、さや町へ飛び移り、牧野佐渡守、鳥井主膳正、小濱民部少輔、その他町奉行の同心屋敷、八町堀の御舟藏御舟奉行衆の館數ヶ所、海邊には松平越前守、さしも大きにつくりならべられし殿舎とも、風にしたがひ煙につゝまれて焼けあがり、猛火の盛んなる事四王刀利の雲の上まで登るらんとぞ覺ゆる。

こゝに於て數萬の男女煙を逃れんと風下を差して逃げ集る程に、向ふへ行詰り鑑岩寺へ駆け籠る。墓所のめぐり甚だ廣ければよき所なりとて、諸人爰に集りゐたる處に、當寺の本堂に火かゝり、それより數ヶ所の院々燃え渡り一同に焼け上がり黒煙天を焦し、車輪程なる焰飛散り風に放されて雨の降る如く、大勢群がりゐたる上に落ければ、頭の髪に燃えつき、袂の内より焼け出し、誠に堪へ難ければ、諸人あわてふためき火を逃れんとて、我先きにと鑑岩寺の海邊を指して走り行き、泥の中にこけ込みけり。寒さはさむし食はくはず、水に浸りて立ちすくみ火をば逃がれたりけれども精力盡き果て、大方凍死す。猶それでも逃げ伸ぶることの叶はざるともがらは、炎五體にもえつきて悉く焦れ死す。

うめき叫ぶ聲凄まじくものゝ哀れを止めたり。すべて水火二つの難に死に亡ぶる者九千六百餘人なり。此海邊まで塵も残らず焼き拂ひ、海のむかひ四五町西の方佃島の内石川大隅守のやしき、同じくそのあたりの在家一字も残らず焼け失ふ。

○

その日の暮方に及んで、西風いよく烈しく吹き落ちて海上は波高く上り、其上に去年の冬より久しく雨降らず乾き切つたる事なればなにかは堪たまるべき、風に飛び散る焰十町二十町を隔てたる所へもえ付きく焼あがる程に、神田の明神皆善寺社頭佛閣といはず、堀丹波守、太田備中守、村松町材木町に至るまでの家々悉く、柳原より和泉どの橋を切つて皆焼け通りぬ。

扱又右の駿河臺の火頻りに須田町へもえ出て、一筋は真直に通りて町屋を差して焼け行く。

今一筋は誓願寺より追廻して押し来る間、江戸中町屋の老若こはそも如何なる事ぞやとて、おめき叫び我もくと家財雜具を持ち運び、西本願寺の門前に卸し置きて休みける程に、辻風騒しく述き卷きて寺の本堂より始めて、數ヶ所の寺々同時に簾すだれと焼け立て、山の如く積み上げたる道具に火もえ付きしかば、集り居たりし諸人あわてふためき命をたすからんとて、井のもとに飛入り溝の中に逃のへりける程に、下なるは水に溺れ、中なるは友に押され、上なるは火に



焼かれ、こゝにて死する者四百五十餘人なり。

さて又始め通り町の火は傳馬町を焼き、數萬の貴賤此よしを見て、退き足よしとて車長持を引連れて淺草を指してゆくもの千百とも數知らず。人の泣く聲、車の軸音、燒崩るゝ音に打ちそへて、さながら百千の雷の鳴り落つるもかくやと覺えて、おびたゞしともいふばかりなし。親は子を失ひ子は又親に遅れて押し合ひ、揉み合ひ、せき合ふ程に、或は人に踏み殺され、或は車に牽かれ疵を蒙り半死半生になりておめき叫ぶもの又その數を知らず。

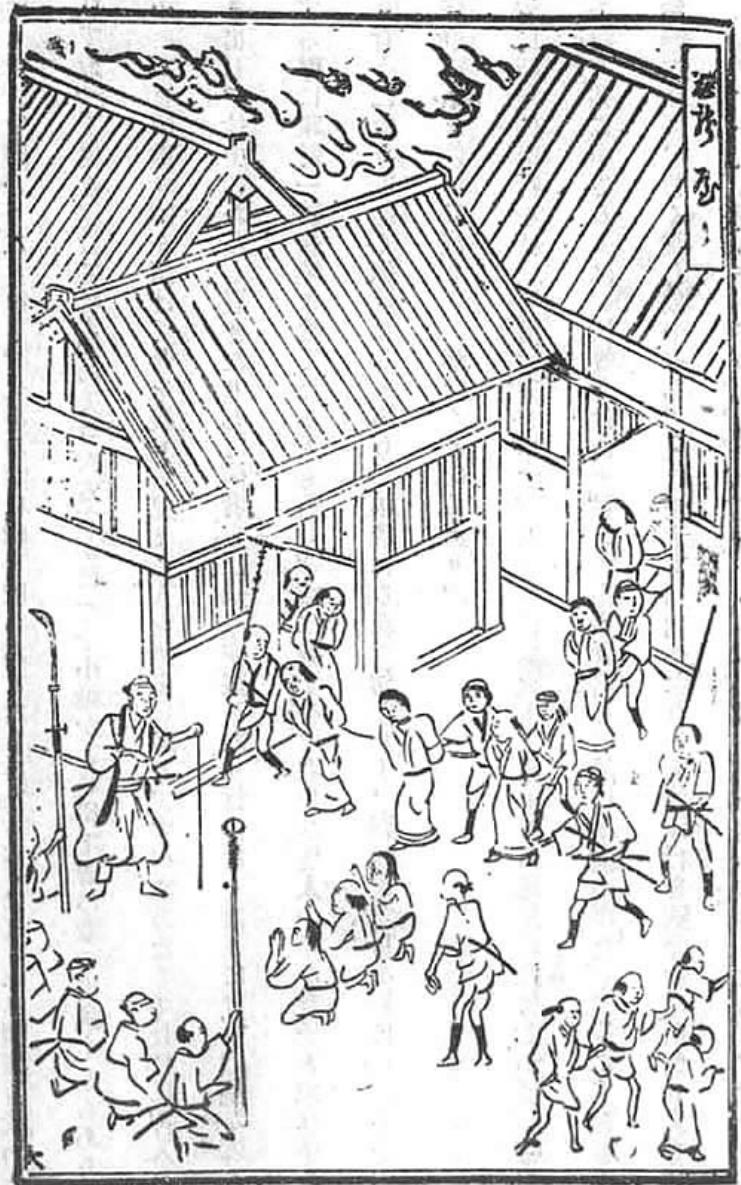
○

かゝる火急の中にも盜人はありけり。引き捨てたる車長持を取つて方々へ逃げ行くこと、更にをかしかりけるは、位牌屋の某が我が一跡は是なりとてつくりたてたる大位牌小位牌、漆塗り箔綵いろ／＼なりけるを、車長持に打ち入れ引出しあまりに間近くもえ来る火を逃れんとて打ち捨てたるを、いつの間にかは取りて行き、淺草野邊にて餌をねち切り蓋を開けたりければ

用にもなき位牌どもなりけり。火事を幸に物を取らんとねらひたる盜人共、或は攘夷を米かと思ひて取つて退き、或は藁草履の入りたる古かはごを小袖かと心得て奪ひ取つて逃ぐるものあり。其中に此日頃重き病を請けて今を限りと見えし人を火事に驚き、すべき方なく半長持に押入れかき出し、辻中におろし置きたりしに何者とは知らず盗み取り行方なくなりにけり。是を尋んとする程に家財一跡皆焼き捨てたる人もあり。或は我子をば取失ひ他人の子を我子と思ひ手を引き背ろに負うて遠く逃げたるものあり。年老たる親、幼なき子、脚弱き女房を肩にかけ手を引き背中にかき負ひて泣く／＼落行くものもあり。

爰に籠屋の奉行をば、石出帶刀と申す。しきりに猛火もえ來り既に籠屋に近付しかば、帶刀即ち科人共に申さるゝは、汝等今は焼き殺されん事疑なし、誠に不憫の事なり。爰にて殺さんも無難なれば、暫く許し放つべし。足に任せて何處へたりとも逃げ行き隨分命を助かり火も解りたらば、一人も残らず下谷のれんかい寺へ來るべし。此義理を違へず參りたらば、我身に替

へても汝が命を申助くべし。若し又此約束を違へて參らざる者は、雲の原までも探し出し其身の事は申すに及ばず、一門迄も成敗すべしとありて、即ち籠の戸を開き數百の科人こがにんを許し出して放されけり。科人共は手を合せ涙を流し、かゝる御恵みこそありがたけれとて、思ひくに逃げ行きけるが、火静りて後約束の如く皆下谷に集りけり。帶刀大いに喜び汝等誠に義あり、たとひ重罪なればとて義を守る者をば如何でか殺すべきやとて、此趣きを御家老方へ申上げて科人こがにんを許し給ひけり。道ある御代のしるし直なる政事、上に正しければあまたの科人こがにんども義を守りて命を助けられることありがたけれ。此事を聞く者皆いふ、帶刀に情けあり、科人にまた義あり、御老中に仁ありて命を助け給へり。爰に於て國道あることは明けしとぞ感じける。其中に一人の囚人しかも至つてつみ科の重かりしが、よき事に思ひて遠く逃げ伸び、我が故郷にかかりしを在所の人々、この者は助るまじき科人なるに逃れかへりしこそ慘しけれとて、連れて江戸へ参りければ、奉行方大いに憎ませ給ひて殺されしとあり。



しかるにかの淺草の惣門をこゝろさして逃げ出る輩、貴賤上下幾千萬ともかすしれず。されども向はひろき河原なり。拵がたをだに出たらばさのみせきあふまじかりしを、如何なる天魔の業にや、籠屋の科人共らうを破りて逃げるぞや、それ逃がすな捕へよと云ふ程こそ有りけれ淺草の拵形の惣門をはたと、うちたりけり。それは思ひもよらず、諸人何れもわきまへなく跡より車をひきく押し来る程に、傳馬町より淺草の惣門づるちのきは迄、其道八町四方が間、人と車長持をひしどつかへて、いさよかきりを立べき程の空地は更になし。門はたてゝあり、あとよりは數萬の人押しにおされてせき合ひたり。門の際きなる者共いかにもして、門の關貫を引きはづさんとすれども、宝財雜具をいやが上にも積み重ねたれば、これにつかへて扉更に開かれず。拵てこそ前へ進まんとすれば門は開けず、後へ返らんとすればあとより大勢せきかる。身體こゝに谷まり手を握り身を揉みて、只あきれはてたる所に、此のかたはじめ焼となりし柳原の火起りて、せいくわん寺前の大名小路へ押し移りて、立花左近、松浦肥前、細川帶刀



丹羽の式部少輔、遠藤たじま、加藤出羽守、同じく遠江、山名、禪閣、一色、宮内の少輔、都

合三十五箇所、寺かたにては、日輪寺、本禪寺を始めとして、ちそくゐん、こんがうゐんに至るまで、百二十ヶ寺一同にもえたつ。右傳馬町の火と一つになりて焼けあがり、焰は空にみちみちて、風にまかせて飛ちりつゝ、重なり集り押し合ひ揉み合ふ人の上に、三方より吹かけしかば數萬の男女騒ぎたち、あまりに堪へかねて或は人の肩をふまへて走る者あり。これはくと云ふ程こそありけれ。高さ十丈許りに切りたてたる石垣の上より堀の中へ飛入りけり。責めて命はたすかると斯様にせし輩、いまだ下迄おちつかず石にてかうべを打ち碎き、腕をつきをり半死半生になるものあり。下へ落ち着く者は腰を打損じて立あがる事を得ざる所へ、いやが、上にとびかさなり、おちかさなり、ふみころされ、さしもに深き淺草の堀は死人にて埋みけり。其數二萬三千餘人、三丁四方に重なりて堀はさながら平地になる。後々にとぶ者は前の死骸をふまへて飛ぶゆゑに、その身少しもいたまずして河向にうちあがり、助かる者も多かりけりと。

かくする間に重々にかまへたる見つけの櫓に猛火もえかゝり、大地にひゞきて、どうと崩れ死人の上に落ちかゝる。刲て人にせかれて車にさへぎられて、いまだ後に逃げおくれたる者は向へ進んとすれば前には火すでにまはり、後よりは火の煙雨の如くに降りかゝる。

諸人聲々に念佛申す事、きくにあはれを催す間に、前後の猛火にとりまかれ、一同にあつと叫ぶ聲、上は悲想のいたゞきに響き、下は金輪の底迄も聞ゆらんと、身の毛もよだつばかりなり。翌日見れば、馬喰町横山町の東西南北にかさなり臥したる死人の有様、目もあてられぬ有様なり。初夜の亥の刻ばかりにうつりては、惡風なほもしづまらで、海手をさして下屋敷以上九ヶ所一つも残らず炎上せり。此時に當つて御倉のうしろに逃げ隠れたる者、七百三十人ありけるが、御倉に火かゝりてつめおかれし米俵にもえつきたれば、諸人此の烟にむせび、打ち倒れふしまろび或は川中にころび入りて死す。それより前は七八町も隔てし大河を飛越え、牛島新田に至り島の在家までことごとく焼け亡びて、其夜寅の刻に火事は之れまでにしてしづまりぬ。

すでに明ければ、四方八方へおち散りける者共、親は子を尋ね、夫は妻を失うて涕と共に聲打ちあげ、そんどう、そのなにがしと名を呼びつゝ、聲々によばはりてやう／＼尋ね合ひて互ひに喜ぶ人もあり。又は死に失せてめぐり逢ふ事なく、力おとし歎くもありて、ものゝわけも聞えず。爰かしこに集りて焼け死に重なり臥したる死骸共をかきわけ／＼、親子兄弟夫婦の屍を尋ね求むるに、或は頭の髪みなもえつくして、半は過ぎて大方尼法師の如く黒くすぼりに焼けこがれ、或は小袖きる者皆もえ失せて五躰やけめぐり、堅横に内さけて魚のあぶりものゝ如くなるもあり。見しにもあらぬ面忘れてそれがこれかと見違へて尋ね惑へるも多かりけり。其まぎれには盜人共たち交りて、死人の腰につけはだへに著けたる金銀をはづし取り、そのやけ金を拵出して賣り代となす。之を又買ひとらんとて集りける程に市の如く、その外町の中辻小路に落し捨てたる家財雜具とも數も知らず、拾ひ取り拵出して賣り代となし俄に德付もうけたるも多かりけり。

り。

樂齋房父語りける様、某の母もゆき方なくなりしかば、今は定めて空しくなりぬらんと思ひ定め、夜の明け方に死人の重なり臥したるあたり、かなたこそと尋ね求めしに、似たる人焼け死んでうち臥したるを、之ぞそれよ、いざや家に取りて返り葬禮佛事せんとて戸板に乗せて家に歸りければ、孫子兄弟あつと、枕にさしつどひて歎き悲しむ處に、門よりしてまことの母歸り來れり。人々此の由を見てあれはいかに、はやもう靈になりて來り給ふぞや、此日ごろ申給ふ念佛は何のためぞや、妄念をもさまして速に極樂の上品上生に往生せんとこそ思ひ給ふべきを、まだ此の娑婆に執心を残して妄靈になりて來り給ふかや、淺ましき御事なり。とくとく歸り給へ跡をばねんごろに弔ひてまゐらすべし。かまへて六道の辻にまよひ給ふなと云ひければ、母大に悟よどき我は芝口まで逃げ延びて命たすかり侍り、死なずして歸りしをば喜こばで、それは如何なる事を云ふぞやと申さるゝ。人々聞きて御死骸はまさしく之れに有り、死なずと



宣ふこそ心得侍らぬとて、彼取りて歸りし屍をよく見れば、さしもなきものゝ屍なり。人
ちがへは世の常に有ることなれども、にがくしき中にをかしかりける事なり。まづ何事もなく
歸りおはせしこそ嬉しけれとて、取るものも取あへず、かの屍をばひそかにかきすてたる由
々しさよ。さらば一類何事もなく助かりける祝ひ事せよやとて、酒肴買ひ求めてかなたこなた
數献に及び喜ぶ事かぎりもなし。

○

明れば十九日、江戸中に喜びをなす者歎きをいたすもの相交りていと騒々しかりけり。焼残
りし貴賤その一族其の類火にあひしを、日頃のよしみ此時なり。いかでか見捨べきとて焼けあ
とはせ集り、とやかくと駆けまはる。或はかゆを煮て持ち來り、或は酒肴をおくりつかはし
なんとする處に、已の刻ばかりに、小石川の傳通院表門之下、新鷺匠町大番衆與力の宿所より
焼け出でたり。此の煙のありさまを遠き所より見るものは、暫しが間は旋風にまき上ぐる土煙

なりと云ふ者もあり。又昨日の焼野の消え残りたる煙なりと云ふ者もありて、火事とはしかと見定めず。然も北風宵よりも猶はげしく吹きしかば、時刻をうつさす吉祥寺の學寮院々坊々もえうつり車輪ほどなる炎、黒煙りの中に飛びちりて、十町廿町が外にもえわたる事、同時に廿餘ヶ所なり。

暫しが中に水戸中納言殿さしもに造りならべ給ひし大なる御やかたに火かゝり、焰と烟とをまきたてもえ上り、大堀をへだてし本郷町の森のした飯田町典壽院の御所、左右典厩公の兩御殿、中の丸御殿、二の丸三の丸を初めとして、松平加賀守、同じく伊豆守、土炊遠江守、水野出羽守、木多内記、酒井攝津守、膝堂大學頭、小笠原右近太夫、安藤對馬守、土屋民部少輔、井上河内守、酒井雅樂守、松平和泉守、同じく五郎同越前守、此等の御やかた金銀珠玉をちりばめてみがき立たる、大厦高樓むねとの大名十五ヶ所、其外兩奉行の御番所、中川半左、伊奈半左衛門、天野五郎太夫、御細工小屋ともに五ヶ所、常盤橋を打合せて二十ヶ所、それより打

續きて鍛冶橋の内むねとの大身には、細川越中守、松平新太郎、同じく相模守御執事酒井讚岐守、山内土佐守、有馬中務、京極丹波守、戸田左門、蜂須賀阿波守、森内記、京極主膳守、小笠原主膳正、吉良若狭守、保科彈正、松平丹波守、溝口出雲守、新庄越前守、松平但馬守、織田因幡守、松平遠江守、同出雲守、小出伊勢守、織田丹後守、杉原帶刀、松平能登守、伊丹藏人、久世三四郎、酒部三十郎、同じく長門守、毛利市三郎、水野下總守、山名主殿、米津内藏介、前田右近、出野甚助、中根吉兵衛、近藤石見守、同縫殿介、日根野、織部、神尾、宮内傳奏屋形、醫師道三に至るまで、大名の屋形廿六ヶ所、小名の屋形十七ヶ所、伊達遠江守、奥平大膳正、完田河内守、大久保加賀守、伊井兵部、松平山城、青山大膳、九鬼大和守、堀の美作、各々數寄屋橋の内九ヶ所、南北都合七十一ヶ所、年月日比つくり並びたる屋形の善つくし美つくし磨き立たる大厦高牆の構へ、數萬間前後十五町一同にもえ上り、黒煙天をこがし炎は雲を焼き、棟木瓦の崩れ落ちる音夥しともいふばかりなし。乾坤これがために傾き山河此故に覆す

かと諸人肝を消し魂を失ふ。世界ながら猛火となる。たゞこれ大の三災一時に起りて、國土ことぐく劫火のために焼け失するかとぞおぼえし。

○

申の刻より北風西になほりていよ／＼荒く吹きしかば、これにて焰を吹きゝりて紅葉山西の丸は堅固に残りけるこそ危ふけれ。御馬場の近邊土手を境に屋、ようす河岸へとびうつり、北南二十餘町一面になり町屋を指して焼出づる。之によつて中橋京橋の町人共、昨日の火事の未ださめざるにうちそへて又今日の大火事これはそも何事ぞや、只今世界は滅却するぞやと云ふ程こそ有りけれ。大いに周章騒ぎて昨日の焼跡へのかむとて中橋を北へと志すものもあり。又風下を心がけ京橋を南へと走る人もありて、男女家も町も上を下にもてかへし、鍛冶町と長崎町の者ども前後一つになりて逃げ出しつゝいやが上にせきあひたり。

去年霜月の比より今日に至るまで、既に八十日ばかり雨一滴も降らで乾き切つたる家の上に



火の子おちかゝり、烈しき風に吹きたてられて、車輪の如くなる猛火地に遊り町中にひき出し
火急を逃れて打捨てたる車長持は辻小路に積み上げせきあひ、人更に心のまゝに通り得ず。諸
人揉み合ひひしめく間に、猛火さきへへともえわたりしかば、目の前に京橋より中橋に至る
まで四方の橋一度にどうと焼け落ちる。こゝに於て火の中にとりまかれたる諸人一連に南に行
き北に歸り東西を足搔きめぐり聲をそろへておめき叫ぶ、既に真近く迫りてもえ來りける時、
餘りに堪へ兼ね、我人を互に楣になして火をよけんとする中に、まくれかゝる煙にむせびてふ
しまろぶるものもあり。或は五躰に火もえ付きて倒れ惑ふせきあひおし合ひける中に、煙にむせ
び火にやかれて打倒るれば、その後なるものども將某倒しの如く一同に倒れころぶ其上へ炎お
ちかゝり、煙渦巻きおめき叫ぶ聲、これやこの地獄の罪人共の焦熱大焦熱の焰に焦され、獄卒
の呵責をうけ叫喚大叫喚の聲を上げて悲しみ叫ぶらんもかくやと覺えてあはれなり。爰に焼け
死する者およそ一萬六千餘人、南北三丁東西二丁半にかさなり臥す累々たる死骸更にあき地は

なかりけり。家財雜具太刀かたな金銀米錢數を知らず、辻小路にうちすてふみつけ焼け失せる
哀れと云ふも愚なり。

それより南は、新橋木挽町、東は材木町水谷町へ焼けたり、二町あまりの川むかひ紀州大
納言、尾張大納言の兩御藏屋敷より奥平美作守に至るまで、大名の藏屋敷十六ヶ所悉く塵灰と
なる。果ては鐵砲津てつぱうづへ吹つけて其日の酉酉の刻ばかりに、海邊にて焼とまる。淺草附深川よりこ
れまで憲じて六里あまりの湊々にて舟どもの焼けること幾萬艘とも數知らず。かくてやうへ
焼けしづまるかと思ひしに、申の刻ばかりに江戸城の西麿町五丁目の在家より別に火もえ出で
松平出羽守、越後守、同じく但馬守其外數十ヶ所、さしも綺麗嚴淨なる山王權現勸請之地天神
の社に至るまで、忽ちに咸陽一朝の煙となり、いよ／＼西風烈しくして東照權現の御社、紅葉
山へ猛火しきりに吹付けしかば危ふかりける處に、權現應護の御力をや添へられけん。俄に北
風となりて吹きければ、西の丸つゝがなく残りけるこそめでたけれ。それより南の方大名小路

へ焼け通る。伊井掃部頭、上杉彈正少輔、毛利長門守、伊達陸奥守、島津薩摩守、黒田右衛門介、鍋島信濃守、南部山城守、眞田伊豆守、丹羽左京、相馬大膳、京極刑部少輔、松平伊賀守同周防守、戸澤右京、水野美作守、水谷伊勢守、金森長門守、板倉周防守、土方河内守、相良左兵衛、淺野安藝守、同内匠、同因幡守、仙石越前守、龜井能宣守、伊藤大和守、松平左京太夫、同大和守、柳生主膳正、秋田淡路守、小出大和守、大田原備前守、大關土佐守、鍋島紀伊守、究竟之屋形廿六ヶ所、小名には、兼松又四郎、高木肥前を始として都合二十餘ヶ所、その外御成橋の御門の中は一ヶ所も残らず忽に片時の煙となりにけり。又西の丸の下に至りて、安部豊後守、堀田上野守、水野監物、松平外記、北條出羽守、稻葉美濃守、大久保右京、酒井備後守、松平縫殿、同若狭その外一文字に櫻田の町屋に焼移りて、直ぐに愛宕の下大名小路へ打續く、まづ大名には、有馬藏人、大村丹後守、秋月長門守、稻葉能登守、脇坂淡路守、中川内膳、島津但馬守、一柳監物、木下伊賀守、山崎甲斐守、植村出羽守、桑山修理、青木甲斐守、

分部左京、北條美濃守、松平隱岐守、大島茂兵衛、小出大隅守、織田源十郎、堀三右衛門、佐久門不干、内藤左京、龍瀬小十郎、伊達政守の中屋敷、毛利長門守の下屋敷、同吉川美濃守の宿所をはじめとして、大名小名のやかた八十五ヶ所、同時に焼けくづれたりとて、櫻田の火すでに通り町にもえ出て、海邊にて保科肥後守の下屋敷、伊達陸奥守の倉屋敷、脇坂淡路守の下屋敷、又その他に、芝の濱手には松平相模守、龜井能登守下屋かたに至るまで以上都合十八ヶ所、増上寺の中には東照權現の社頭台徳院、同じく御臺の御廟、同じく本堂經藏鐘樓五重の塔婆、三門北の裏門などは恙なく相残れり。されども所化寮百十ヶ寺、おもての東門神明の本社神樂堂ごま堂、怪しかずならぬ禿倉に至るまで、その夜の丑の刻ばかりに皆ことごとく炎上せり。此時分には風をだやかにゆるく吹ければ、打消すならばたやすかるべきに諸人たゞ驚き慌てゝ方々に逃げ散りて、命を大事とかまへたれば人更になし。風は吹かねども火は心のままに焼けゆく程に、増上寺より南へ十一町芝口三丁目、海手に至りて火は自から消えにけり。

本郷よりこれまでその道すでに六十餘町四方十餘里、正に廣き野原となりて渺々としてほとりなし。總じて町中五百餘町、大名小路五百餘町大名のやかた五百餘字、小名宿所六百餘ヶ所その他汎々の奉はあげて數ふべからず。御城の殿守大手の御櫓をはじめて外郭淺草の見付神田の櫛形に至るまで矢ぐらの數三十餘箇、又日本橋をはじめとして、江戸中にありとあらゆる橋橋六十ヶ所、此の中淺草橋と一石橋一つ、即ち其橋もと後藤源左衛門と云ふものゝ家ばかり江戸中の名残に只ひとつ焼けのこる。土蔵の數九千餘庫その中に焼残りたるは十分が一もこれなし。代々の重寶家々の記録も此時に當りて失せねらん。

次ぎに堂社には神田明神、山王權現、天神の社、神明の本宮、誓願寺、知足院、日輪寺、西東兩本願寺、本誓寺、藥師寺、珠見寺、願教寺、唯念寺、地藏院、靈岸寺、報恩寺、開泉寺、長久寺、信經寺、常蓮寺、増上寺の所化寮、開善寺、海安寺、常德寺、圓應院、その他の寺院

三百五十餘字、皆ことく焼け亡びたり。昨日十八日の晝より焼おこり十九日のあけぼの廿日の辰の刻まで、晝夜四日の大火事に夥しき旋風ふきて、猛火さかりになり十町廿町を隔てゝ飛びこみ／＼もえ上りける程に、前後更に辨へなく、諸人逃げ惑ひて烟に焦がされ煙にむせび又は大名小名の家々に日頃年頃ひさうして立飼はれる馬共、いくらと云ふ數知れず。家々に火かゝればすべき方なく、綱を切りて追ひはなし／＼せられしかば、此馬共人と火とに驚き、逸散にかけ出し、あまた群がりたる人の中にかけ込み行きつままりて人と馬と押合ひ揉み合ひければ、これにふみ殺され打倒され火に焼かれ烟にむせび、あそこ、爰の堀溝に百人二百人ばかりづゝ死に倒れたるを見ざる所もなし。火しづまりて後つぶさにして人は付けたれば、凡十萬二千百餘人とぞ書きたりける。一類眷屬のある者は尋ね求めて寺におくりしもあり。大方は如何なる人、何處の者ともたしかならず、變り果てたる有様それとさたかに知る事もなし。やがて此の死骸をば河原の者に仰付られ、武藏と下総との境なる牛島と、ふ所に舟にてはこびつか

はし、六十間四方に掘りうづみ新しく塚をつき、増上寺より寺を建て即ち諸宗山無縫寺回向院と號し、五七日より前に諸寺の僧衆集り千部の經を讀誦して魂をとぶらひ、不斷念佛の道場となされけるこそ有難けれ。江戸中の老若男女袖をつらねて參詣し、聲打上げてもろともに念佛回向することぞ尊とけれ。

或は老たる祖母祖父は生歿りて、若くさかんなる孫子を失ひ、或は女房たゞ獨り残りて子供や夫に離れたるもあり。凡べて一家の内には五人三人又は十人餘りも空しくなりて、つれなく只一人二人生残りて歎き悲しむと云へども、さすがに身をも捨てられぬは血の涙を流して泣くより他の事なし。家々は残らず焼けて江戸中廣き野原となりて取囲ふべき竹の柱、菅菰だなければ、焼土の中にうづくまり、晝はせめてもの音にまぎれよかし。夜に入ればなんとなく物凄じく、思ひめぐらせば悲しきともつらきとも言葉にはのべ難し。親におくれ夫に離れ子を失ひ妻を殺して悲しさのあまりに、五輪卒都婆を買ひ求めて回向院につかはし、無縫塚の上に立てる。



ある人家に十人餘り失ひて其爲に卒都婆を十本求めるが、此の中へ今一本を添へて給れと云ふ。賣手聞きていふやう、五輪卒都婆などと申ものは餘計多くはせぬ事なり。何の爲に一本を添へよとは宣ふといへば此人答へて申さるゝは、親類のうちに燒毒ヤケドをしていたむものあり。

若し死にたらばそれにもたてゝとらせんためなりと答へけり。いにしへ五輪を添へよと申せし話の有りて世の笑ひ種となれり。時にとつては斯様の事も有りけるものかな。數多の死屍を一つ穴にうづまれし事なれば、我親類はそこもとに埋れたりとは知らねども、責めて悲しさのあまりには思ひ／＼に五輪卒都婆を塚の上に立てならべて、聖靈頓證佛果のためと回向して花をさし水をくみて跡をとぶらひ、泣く／＼念佛申すありさま見聞くにつれてあはれなり。

去年の十一月より當年正月に及まで日照りして青天さやかに黃泉も乾きて、今月の廿日まで雨一滴も降らざりしに、廿一日に大雪俄に降り積みて暴はげしく寒き事いふばかりなし。かる程に江戸中には米といふもの一粒もなく三日が間大飢饉して、其上竹木なれば假屋をもは

らず。大方皆雪霜に打たれて、寒さはさむし飢凍えて老少男女多く死にけり。一業所感の因果人とも死すべき時のさだまりけん。火を逃がれては水に溺れ、餓ては死し、凍えては死す。いづれ命は助からず無慚ヒヨクといふも愚なり。しかる處に御城の西の方、山の手すぢわづかに残りし大名小名よりして、思々に或は日本橋或は京橋と方々に於て假屋をたて、奉行を添へられ粥を貢て飢ゑたる者に施行せらる。又御城中よりは、内藤帶刀、松浦肥前、岩木伊豫、此等の人々を御奉行として御成橋、新橋、日本橋、筋かひ橋、増上寺前に假屋をたて粥を貢させて飢人窮民に施行し給ふに、江戸中の老若男女集りて給はる。元より受けて喰ふべき入れ物もなければ、焼われたる茶碗のかけ、瓦のわれにてうけて食す。それにも及ばず餘りに寒く飢えたる悲しさに直ちに手にて受くるもあり。其諸人の有様或は頭のかみかた、顔なかば焼け焦げたるものあり。或は小袖の前後裾までももえたるを揉み消してやう／＼肩にかけ手足の焼損じたるものあり。妻子孫子に別れて泣々集まる人も有り。昔はさしもに富貴榮華なる人も、一跡皆失ひつゝ手と身

となり命許りを助かりて、寒さのまゝに恥を忘れたる若き女房なども多く集りて、小鉢の
破れに粥をうけて泪と共に喰ふもあり、哀れなりける有様なり。

○

さて二月の中頃には城外の在々には、それぐに小屋を立て商賣を營む。江戸中の焼け出されは諸縁にしたがひて入込みしかば、貴賤の出入しげく、さしも賑ひて見ゆ。三月の比には鬼角才覚をめぐらし、町屋とも形の如くの柴の庵を結び、雨風をふせぎしはそのかみにひきかへといとゞ物哀れなり。誠に治世安民の政道たゞしき御事なれば添けなくも公方より銀子一萬貫目を町人にくだし給はり、之れにて家を造りもの如く商賣すべしと仰せ下さる御町奉行、神尾備前、石谷將監兩人承り江戸中四百町城外の邊町百餘町の町人を召寄せて相渡さる。その年の九十月には土木の功なりて、町並一様に六萬の棟をならべ、軒をそろへて綺麗にたて侍り、もとの大地は廣さ六間なれば往来せばしとて今はひろさ十間となり、これによつて車馬道にと



どまらず人のゆきかひやすらかなり。又白金町より柳原まで町屋一通り除けられ、高さ二丈四尺に石を以て東西十町餘りに土手をつかせらる。日本橋の南萬町より四日市までの町屋をとりのけ、高さ四間に川端に添うて北をうけ東西二町半にたゞみ上げらる。

又日本橋より京橋まで八町の間せきあひ諸人いやが上に入込み、やゝもすれば失火を出し、人物を損ふ事度々に及ぶ故、土手をつきたらば江戸中のもの如何なる事ありとも退足のきるしたやすくためにとの御事なり。扱て右の取りのけられし五ヶ所の町人共には、引料として家一家に付金子七十兩宛給へ替地にそへて下されけり。又その年の暮には焼たまひしやかたのの太名小名へ残らず黄金を恩賜有りけり。上は公侯より下は民間に至る迄、あまねき君の御恵みに程なくもとの如く江戸中治り繁昌して高家貴人は禮義厚く、あやしの庶民も財産の利に飽きてめでたくさかふる事日々に百倍せり。

○

樂齋房申すやう、如何に猶物うりどのきゝ給へ、某十八日の火事には親類家中無事なりしかば、めでたき事なりとて酒さかな買求め、十九日のあしたに祝事して數獻飲みける酒に酔ふし、前後更に知らざりしに又火事よといふに、妻子ども我をいかにすべきとて、車長持に押し入れ鑓をおろして引出し芝口に打捨てたり。

盜人共、集り鑓をねぢきり長持を打破る音耳に入り目をさまし、あたりをさぐりまはせば四方板なり、傍には刀一腰小袖なども手にさはれり。某思ふやう、我是死に侍り棺に入れて野邊に送りたり。獄卒共が苛責せんとて斯様に棺を打破るなり。此刀にて一先づふせぎて見ばやと思ひ、引ぬきてをどり出でたれば、盜人共はきもをけして逃散りけり。

揚て立あがりて見ればあたりは暗闇やみにて遙かの東はぼうくともえて人のおめき叫ぶ聲きこえしを心に思ふ様。あそこは定めて無間の地獄なるべし。罪人共の猛火に焦がされ獄卒共に苛責せらるゝ音ならん。あら恐し如何にもして極樂の道に行かばやと思ひて行きければ、馬共多

く離れて駆け来る。さてはこゝもとは畜生道のあたりなるべしと思ひて、猶たどり行くに、女わらは老たる者共人の肩にかゝり引立られて來るを見ては、是は只今空しくなりける罪人を、娑婆世界より獄卒共の連れて來るにてぞあるらんと、心に心をまよはされ暗き方に行けるが、芝口に出でつゝ十王堂の體をみれば、灯明かすかにかゝげ、ゑんま大王俱生神ならび給へり。それがしは娑婆にありし時に人惡ろかれとも存ぜず、人の物は盜みたる事もなし。折々念佛を申侍り。定めて罪科もからく侍らんに、極樂に送りて給はれと云ふに、もとより木像の、焰魔大王なればとかくの返事もなし。如何なる目にかあふべきと恐ろしさにそこを走り出て、かなたこなたとする處にかねの音、念佛の聲の聞えけり。

是ぞ西方極樂の上品上生なるべしと思ひ、近く立よりて門を叩けば内より何ものぞといふ。娑婆の往生人にてはべり、爰を明けさせ給へ、觀音正姿、早く百寶しやうごんの蓮のうてなの上にのぼらんといふに、内より大きに笑ひどよめき、火事にうろたへて氣のちがひたるものゝ

來れるぞやといふ。力なく其所を行きすぐるほどに夜はほの／＼と明けにけり。

かかる所に大名がたの焼屋敷にて粥を煮させて施行し給ふを見れば、諸人集り手をさし出して之れを喰ふ姿、何れも物かなしく淺ましかりければ、爰は定めて餓鬼道なるべしと思ひ、又傍を見れば物をとりて逃ぐる盜人を追かけて只一打に切倒すを見ては修羅道かと思ひ、念佛申て休みるたれば知れる友達來り是は如何にといふ。

こゝにて夢覺めつゝはづかしき事かぎりなし。一門妻子家も寶も皆ほろぼしょかば、これを菩提の縁となしすぐに髪剃り衣をすみに染めて之れまでさまよひのぼりしなり。我生ながら六道をめぐりたりと覺え侍り、今は中々世を渡る物うさにくらぶれば生佛になりたり。心にまかせて行きたき方に行きつゝ今少しの命をたのしみ侍り、佛種じう縁起と佛のとき給へり。火事にあうて一跡皆倒れしはもの憂き事ながら、菩提の縁となるからにはよき善知識にてはべらずやといふ。

こま物賣かさねていふ様誠にかゝる一大事こそためしもまれなる。思ひがけぬ事には必ず心

うらたへて斯様のをこがましき事もあるものなり。さのみに恥とおぼすべからず。扱て古も斯様に人の大勢一同に死したるためしもありけるかといふ。樂齋答へて曰く昔の事を傳へきくにも

るこしには、宋の仁宗皇帝の御宇景祐四年十二月に、夥き大地震ありて民の家々をゆり倒す。

これにおされて死するもの一萬一千三百人、瘞をかうぶりて半死半生になり、或は一生の片輪になりけるもの國中に五千六百人とするせり。其後又大元の世宗皇帝の御宇祥興廿七年八月に又大地しきりに動いて山くづれては谷を埋み、大木倒れては川をせき、地はさけわかれて下より泥をおしあげ、黒煙り天にまひあがりて國中に人の死する事七千餘人とするせり。同じく宗の成宗皇帝の御世大德十年八月に大地震ありて五千餘人死せり。同じく武宗皇帝の御世至令二年六月に洪水みなぎり來りて、官舍民家を押流す事二萬一千八百廿九軒なり。之れにおぼれて死するもの數を知らずとするせり。其他飢饉洪水兵火にて人民死亡びけること度々多しと見え

たれども、此度の火難の人数に及ばず。

又日本にては人皇第十代崇神天皇の御宇即位五年にあたつて人の死する事天下半に過ぎたりといへども、これは疫癆の流行せしによりてなり。中頃平家世をとりてほしいまゝに奢りけるが、南都の大衆平家をにくみて調伏すると聞て、治承四年十二月廿八日、本三位の中將重衡三萬餘騎にて南都におしよせ、般若坂の在宅より火をかけて攻めければ、七大寺の大衆烟にむせびてふせきかねて落ゆく、乾の風烈しく吹きて黒烟すでに大佛殿にもえつきたり、此大佛殿の上には橋をかまへて、兒わらは尼法師いくらといふともなく上りてかくれたる所に、猛火すでに堂にもえつきしかば、我劣らじと降り下る程に、梯をふみ折りて下になるものは押殺され、上なるものは高き天井より落かさなりけり。天井の奥にありける者共は何をとらへて何をふまへてか下りくだり侍らん、あやしの小屋ならばこそ下より抱きおろし足を捕へても引きおろすべき、さしも日本第一の大伽藍なれば十丈に餘りし梁の上なり。今更助かるべき手だてな

し。あまりの悲しさに飛びおつる者は微塵にくだけて死にけり。火のもえ近づくにしたがつておめき叫ぶ聲天地にひどき。やうやく煙にむせびてふしまろび、頭の髪身の衣に火もえつき、其間に佛殿の火どつともえたちて焼けくづれ、佛と共に灰となりけりと云へり。その後北條平ノ貞時天下の權をとりし永仁元年四月に、俄に大地震して家々をゆり倒す。或は長押におされ壁におされ襲の石にて頭を打くだかる。すべて鎌倉中に死するもの一萬餘人、その外手足を折損んじ耳鼻をうちかきて半死半生になり、永き片輪となるもの數を知らずとするせり。近き頃正保二年には尾州濃州に洪水ありて、兩國一面に海の如く堤くづれ家流れて人多く死したりと聞きしかど、此度の炎上に數萬人の焼死したる事前代未聞の事なり。

何時の頃にやありけん『さざれ石の岩ぼとなりて二葉の松の生そひて』などといへる小歌のはやりて唱ひける折には、上も下もめでたく面白かりけるものを、何ものよつたへてはじめたりけん、此頃北國の下部の米つきうたとかや『柴垣』といふ事世にはやりて、歴々の會合酒宴

の座にても第一の見ものとなり、いやしげにむくつけあらをのこのまかり出黒くきたなき肌をぬぎ、えもいはぬつらつきして目を見出し口をゆがめ、肩をうち胸をたゝき、ひたすら身をもむ事狂人の如し。右に左にねぢかへり仰のき俯向^{うつむ}き足搔^かけるを、座中聲をたすけ手を打つて諸共に興ぜられしを、見る人さへうとましく片腹いたかりしが、諸家ともに皆柴垣となり大方は最早此町には住まれ申さぬもあり、火に焼かれて逃がるゝかたなく柴垣うち／＼果けるにぞ謳歌の事も思ひあはせらるゝと眉をひそめ、はなばしらをじゞめてつぶやく人もありけり。斯様の事も時節到来のことわりなれば、今更おどろくべき事にならぬども、時に行きあたつて諸人迷惑せしづかし。

されども前に語る如く君の御すぐみは、いともかしこくおはします故に、江戸中再び柴にぎはひて國もゆたかになびく『世のなほをさまれるためしとて、松に小松のおひそひて枝もさかゆるわかみどり、仰ぐにあかぬ御世ぞ久しき』と云ふ歌に立かへり侍りぬ。——了——